

〈コレクション展報告〉

令和二年九月五日〜十月十一日

特集展示

没後50年 浪華の女性画家 島成園

本展示は、令和二年（二〇二〇）が大阪を中心に活躍した女性画家・島成園（一八九二―一九七〇）の没後五十年に当たるため企画したものである。成園は、明治二十五年（一八九二）に堺に生まれ、同三十八年に一家で大阪市南区鍛冶屋町に転居、十五歳の頃より父と兄から絵を学んだとされる。大正元年（一九一二）、弱冠二十歳で第六回文展に入選するなど早くから頭角を現し、さらには「美人画」の領域を越えた衝撃的な作品を発表して注目された。成園の活躍は女性画家たちの刺激となり、近代の大阪画壇は多くの女性画家で活況を呈することとなる。

当館には、画家本人および遺族から寄贈された八十八件の作品が所蔵されている。今回の特集展示は、それらの成園作品をできるだけ多く見てもうことが一番の目的であった。「伽羅の薫」「無題」など代表作は館内外で展示される機会も多いが、そのほか大半の作品は展示機会もなく研究者にもほとんど知られていなかったからである。また、この展示を機に所蔵する全作品を掲載した図録を制作したいと考え、外部の補助金などにも応募したが残念ながら叶わなかった。せめてもと思い、本紀要に「大阪市立美術館所蔵 島成園 作品リスト」を掲載する次第である。叩き台として、今後の島成園研究の役に立つことを願う。

実際に展示した作品は八十八件のうち七十三件である。第一室は、「無題」（口絵3）「自画像」「鉄漿」「上海にて」など大正期の代表的な作品を中心に構成した。「伽羅の薫」については、当初は展示予定だったが（当初の会期は四月十日―五月十一日）、コロナ禍で展示期間が変更になったため、以前から計画していた修理期間（六月―翌三月）と重なってしまい展示ができなくなってしまった。「伽羅の薫」が描かれてからちょうど百年という節目の年だっただけになおさら惜しまれる。本紀要が発行される頃には修理された作品が戻ってきているはずである。装いを新たにしたい「伽羅の薫」にご期待いただきたい。

第二室は、昭和期の掛軸と色紙を中心に展示し、画題としては美人画ばかりでなく子ども絵や草花図なども交えて構成した。色紙などは小品ながら見ごたえのあるものが多かったように思うが、展示スペースの関係で一部しか展示できなかったのが残念であった。第三室は、戦後に描かれた美人画の掛軸を中心に展示した。これらの作品は寄贈された当初はほとんどが仮表装だったが、当館に入ってから本格的な表具に仕立てられたものである。最終の第四室では、成園ばかりでなく、北野恒富、中村貞以、生田花朝、融紅鸞といった同時代の大阪で活躍した絵師たちの作品も展示し、成園を巡る絵師たちの広がりを示した。

作品以外のものとしては、第六回および第七回文展入賞褒状や「三日月」（朝日カレンダー）九月号、大阪朝日新聞も展示した。その他、第九回文展の褒状や住吉大社からの感謝状（大正十一年、貞明皇后の住吉大社への行啓に際し献上の色紙を揮毫）も所蔵している。褒状には送られてきた際の郵便用の木箱も付属しており、当時

の様子をリアルに伝えてくれる点で貴重である。

以上が今回の特集展示の概容であるが、島成園の没後50年の大回顧展を期待されていたファンの方々には物足りない内容であったと思われる。特集展示といってもコレクション展の延長であり、特別な予算は無いに等しく、他の所蔵者から作品を借りてきて成園の画業を体系的に紹介するような展示は初めから無理な話であった。必然的に、当館の所蔵する作品を如何に見せるか、また前述のように目の目を見ていない作品をどれだけ紹介できるかがポイントとなった。そのような制約の中で島成園の魅力を紹介することは、近世絵画を専門とする担当者にとっては正直なところ荷が重かったが、年表や画家の言葉を引用したパネルを制作し、既存のケースを工夫して使用することで、それなりにまとまった構成にしたつもりである。至らない点も多かったと思うが、この特集展示を通して当館が所蔵する島成園作品の概容をわかってもらえたとしたら、最低限の役割は果たせたのではないかと思っている。いずれ専門家の手により島成園の大回顧展が開催されることを願いたい。

残りの紙面を借りて、展示の準備に際して調べたことを今後の参考までに記しておきたい。前述のように、当館には画家本人および遺族から寄贈された八十八件の作品が所蔵されている。寄付收受に関する書類を繙くと、「朱羅宇」「伽羅の薫」の二点については、「島成園」の名前で「昭和四十五年三月 日」付（日は空欄のまま）の寄付申出書が出されており、その他の八十六件については「森本美津子」（岡本成薫）の名前で「昭和六十年十月二十三日」付の寄付申出書が出されている。成園は、昭和四十五年二月二十八日に宝塚の新居に引っ越し、直後の三月五日に心筋梗塞で七十八歳の

生涯を閉じたとされているので、書類が成園の直筆であるならば、その寄贈は引っ越しに際してのものだった可能性が高い。もちろん、画家が亡くなった後に遺族が寄贈することもよくあることなので断定はできないが（森本美津子の筆跡のようにも見える）、寄贈作品が大作二点であることも引っ越しに伴う寄贈であることを裏付けているように思われる。

また、同じ寄付收受関係書類の中には手書きの履歴書も残されており、「島成園」の署名に「成園」の印が捺されている。すでに亡くなっているはずの昭和四十五年三月三十日の日付が入れられており（ただし、「30」の数字は若干薄いように見える）、この点については疑問が残るものの、履歴書には従来られていることは少し異なる点もあるので記しておきたい。

- ① 生年月日が「明治二十五年二月十二日生」（従来「二月十八日もしくは十三日生」とされる）。
- ② 現住所が「兵庫県宝塚市梅野町二四」（従来「梅野町四ノ一八」とされる）。
- ③ 履歴に「北野恒富、野田九浦らに画業を習い」とある（近年、恒富とは対等な画家仲間とされることが多いが「習った」という意識はあったことにある）。

以上、些末なことかもしれないが、この履歴書を成園の直筆と考えて良いならば、検討する意味はあるのではないだろうか。

（秋田達也）



島成園 《色紙集 子供》
本館蔵（森本美津子氏寄贈）

No.	藏品番号	作品名称	員数	制作年	今回展示
46	7386	しらべ	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	-
47	7387	三味の音	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
48	7388	現代美人 (雑誌表紙原画)	4 枚	大正後期 (1922-26)	○
49	7389	ほたる	1 幅		○
50	7390	踊	1 幅		○
51	7391	衣しらべ	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	-
52	7392	春日	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
53	7393	葛の葉	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
54	7394	小品集 (肌寒・ねむり・年初め・夏夜・白梅・清水)	1 幅 (6 枚)		○
55	7395	蝶々	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
56	7396	祭の日	1 幅	昭和26年 (1951)	○
57	7397	白扇	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
58	7398	可愛いお客	1 幅	昭和26-34年 (1951-59)	○
59	7399	幼弟子	1 幅	昭和26-30年 (1951-55)	○
60	7400	娘	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
61	7401	夏の夕	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	-
62	7402	帰り路	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	-
63	7403	卯月	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
64	7404	晩夏	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
65	7405	午後の客	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
66	7406	雪の朝	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
67	7407	ほつれ毛	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	-
68	7408	風呂帰り	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
69	7409	人形	1 幅	昭和35年 (1960)	-
70	7410	楚々	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
71	7411	秋の雨	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
72	7412	洗い髪	1 幅	昭和26年 (1951)	○
73	7413	禿	1 幅	昭和26-30年 (1951-55)	-
74	7414	虫籠	1 幅	昭和26-30年 (1951-55)	-
75	7415	手習	1 幅	昭和26-30年 (1951-55)	○
76	7416	想い	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
77	7417	稽古帰り	1 幅		○
78	7418	上海婦人	1 幅	大正13年 (1924)	○
79	7419	花見	1 幅	昭和35-44年 (1960-69)	○
80	7420	母と子	1 幅	昭和26-34年 (1951-59)	○
81	7421	長夜	1 幅	昭和26年 (1951)	○
82	7422	艶姿	1 幅	昭和35年 (1960)	-
83	7423	小品集 (秋の野・青梅・芙蓉・梅)	4 枚	昭和42年 (1967)	△ (3 枚)
84	7424	湯上がり	1 幅	大正15年 (1926)	○
85	7425	若き婦人	1 幅	昭和4年 (1929)	○
86	7426	色紙集 子供	8 枚		△ (4 枚)
87	7427	色紙集 美人 (大首)	16枚		△ (4 枚)
88	7428	色紙集 美人 (全身)	22枚		△ (4 枚)
89	7429	色紙集 花	27枚		△ (4 枚)

※制作年については、基本的に寄贈時の記録に拠ったが一部修正を施した。出品歴が判明するもの以外は検討が必要と思われる。

※No.33、34については寄贈当初は仮表装で1幅にまとめられていたが、それぞれに表装しなおしたため2件として数えた。

その結果、本リストにおける総数は89件となっている。

大阪市立美術館所蔵 島成園作品リスト

No.	蔵品番号	作品名称	員数	制作年	今回展示
1	2257	朱羅宇	1 幅	昭和9年(1934)	○
2	2258	伽羅の薫	1 面	大正9年(1920)	-
3	7344	自画像	1 面	大正13年(1924)	○
4	7345	鉄漿(おはぐろ)	1 面	大正9年(1920)	○
5	7346	送り	1 面	昭和24年(1949)	○
6	7347	御高祖頭巾	1 面	昭和42年(1967)	○
7	7348	無題	1 面	大正7年(1918)	○
8	7349	お紺(伊勢音頭)	1 幅	昭和8-9年(1919-20)	○
9	7350	袖萩	1 幅	昭和10年(1935)	○
10	7351	旅路の花嫁	1 幅	昭和8年(1933)	-
11	7352	晴間	1 幅	昭和8年(1933)	○
12	7353	夕涼み	1 幅	昭和10年(1935)	○
13	7354	葛の葉	対幅	昭和8年(1933)	○
14	7355	春の宵	1 幅	昭和13年(1938)	○
15	7356	白扇	1 幅		○
16	7357	旅芸人	1 幅	昭和7年(1932)	○
17	7358	上海娘	1 幅	大正13年(1924)	○
18	7359	上海にて	1 幅	大正14年(1925)頃	○
19	7360	物寂	1 幅	昭和13年(1938)	-
20	7361	住吉詣	1 幅	昭和27年(1952)	○
21	7362	化粧直し	1 幅	昭和25年(1950)	○
22	7363	夕涼み	1 幅	昭和34-44年(1959-69)	-
23	7364	通り雨	1 幅	昭和26年(1951)	○
24	7365	団扇	1 幅	昭和14年(1939)	○
25	7366	空もよう	1 幅		○
26	7367	帯	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
27	7368	葛の葉	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
28	7369	雪うさぎ	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
29	7370	まどろみ	1 幅	昭和14年(1939)	○
30	7371	朝化粧	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
31	7372	待宵	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
32	7373	おさん	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
33	7374-1	身支度	1 幅	大正8-9年(1919-20)	○
34	7374-2	人形ぶり	1 幅	大正8-9年(1919-20)	○
35	7375	夕星	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	-
36	7376	初秋	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
37	7377	初桜	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
38	7378	おうす	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
39	7379	燈	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
40	7380	燈	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
41	7381	春の章	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	-
42	7382	萩	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
43	7383	娘	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
44	7384	娘	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○
45	7385	琴爪	1 幅	昭和35-44年(1960-69)	○

令和二年五月二十六日～六月三十日

おおさかの仏教美術3

本展は二〇二〇年のはじめから続く新型コロナウイルス感染症流行の状況下で行われた展覧会である。当館は政府による四月七日から五月六日までの緊急事態措置を受けて一時閉館をした。その後、五月二十六日より、入館時の検温やアルコール消毒の設置、受付への飛沫防止ビニールの設置などの対策をした上で再度開館することとなった。

本展の当初の開催予定は五月十二日から六月十四日だったが、会期を変更してスタートした。なおこの時、一階では特別展「フランス絵画の精華」が同時に開幕した。「フランス絵画の精華」は予定会期が四月十一日から六月十四日のところ、五月二十六日から八月十六日に変更している。

今回で三回目となる「おおさかの仏教美術」と題したこのシリーズ企画では、寄託品のなかから、特に大阪府下の寺社よりお預かりしたご宝物を中心に展示するものである。本館北二階第六室を使用し、十三点の大阪にゆかりのある仏教絵画を展示した。

なお、「おおさか」と謳いながら、兵庫県川西市の小童寺ご所蔵の重要文化財「阿弥陀二十五菩薩来迎図」を展示したことについて説明しておく。本作はその詳細な裏書により、元禄十二年（一六九九）以降の伝来の経緯が判明する。元禄十二年時点では、大坂の生玉町にある圓通寺に伝来しており、同寺の住職の實誉を筆頭とした念仏の講中により修理が行われたという。さらに享保十七年（一七

三二）に圓通寺の縁誉から、同じく生玉寺町にある隆専寺の承誉に譲られ、その後宝暦三年（一七五三）には隆専寺の承誉から摂津国川辺郡西畦野の小童寺に寄付されたとのことである。隆専寺と小童寺は共に京都の知恩院の末寺であり、交流の中で小童寺に伝来したと思われる。

（石川温子）



展示風景

休憩ソファには新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ソーシャルディスタンス確保の注意書きを置いた。

令和二年五月二十六日～六月三十日

古代エジプト コプトの美術

コプトとは、エジプトにおけるキリスト教信者、コプト教徒をさす。三世紀から十二世紀頃にかけて、彼らはおもに綴織を駆使して神々や身近な人物、水辺の生物や幾何学模様など、さまざまなモチーフを衣類などの染織品に表している。現存する染織品のそのほとんどは断片（裂）に過ぎないが、エジプトの乾燥した気候により千年以上前の色彩を鮮やかに留めるもので、とりわけ十九世紀以降、欧米だけでなく日本のコレクターをも魅了してきた。

一説によると、古代エジプトが人びとの関心の的となった背景には、十八世紀末から十九世紀初めにかけてのナポレオン・ボナパルトによるエジプト

遠征が影響したと言われている。

同時開催された特別展「フランス絵画の精華」にあわせて、本展ではコプト染織の最盛期と言われる五～七世紀頃の館蔵・寄託品を中心に、同世紀の装飾性に



展示風景

富む建築彫刻もあわせて紹介することで、コプト美術の魅力を広く感じられる企画をめざした。

出品数九十八件（寄託品一件・館蔵品九十七件）

（菊地泰子）



《舞踏模様綴織裂》 コプト・5～6世紀 26.5×39.5cm 本館蔵

令和二年五月二十六日～六月三十日

鳥獣草木 ― 中国・朝鮮王朝の絵画

昨年度に花鳥、人物、山水とジャンルをテーマとして展示を行い、その最後としてこの鳥獣草木を企画した。牛や虎などの走獣、また藻魚、草虫、惣果などの身近な対象を画いた作品をとりあげた。

羅謙「藻魚図」や沈南蘋「梅花鴛鴦図」など、大幅に多くの動植物の姿をとらえた作例は、技巧的で多くの鑑賞者の目に触れる公的な場を想定したものと思われるが、何茂時「白菜群蜂図」や趙溶「菓物画賛帖」などは小画面に画かれ、緻密であったり、あるいは墨戯的であったりと私的な空間での鑑賞が想像される作例である。こういった場で見られるかということも絵画表現の特色に関与するものであるため、対比を楽しめるよう工夫した。

中国、韓国、日本と東アジアの伝統絵画には共有する部分が少ないが、この展示ではどの国でもよく画かれる主題をとり上げて、文化的なつながりや差異に目を向ける機会となるよう企画した。ただし、今回の展示では主題を限ったこともあり、中国の作例が中心となって朝鮮王朝の作例が十分に紹介できなかったため、より広範に見渡せるようなテーマの展示をいざれ設けたいと思う。

(森橋なつみ)



宋人《散牧図》南宋・13世紀
本館蔵（阿部コレクション）

令和二年七月一日～八月十六日

ラブリー！ ジャパン

四季や名所の彩り、人々の暮らし、物語などに心寄せる絵画作品を中心に、愛すべき日本の美を紹介した。凛々しく、雅やかに、ほのぼのとしたニッポンの感性を、夏休みの美術館で味わっていたけたことと考える。激しい戦乱、予期せぬ自然災害や飢饉、疫病など、苦しみの多い時代を生きた先人たちの想いが宿る作品たち。時を経てパンデミックを生きた今の私たちに何を語りかけてきたのだろうか。田万コレクションの「伏見常盤絵巻」、「化物草紙」は近年保存修理が完了し、今回が初披露となった。

田万コレクション「化物草紙」は五話の怪異物語を収めたオムニバス形式の絵巻。十五世紀前半の土佐派絵師・土佐行秀の筆と伝えられるが江戸時代の模本である。近年、本絵巻の説話典拠の研究が進展がみられ、第1～3話は『今昔物語』、第4～5話は閻魔王宮の苦患を説く經典との関係が指摘された。詳しくは以下の文献を参照いただきたい。沢井耐三『室町時代の形象 怪奇ロマンとユーモア』（三弥井書店、令和二年）。

(知念理)



展示風景

令和二年七月一日〜八月十六日

愉快奇怪神獣図鑑 中国古代篇

中国の工芸品には往々にして想像力豊かにかたちづくられた神獣の姿があらわされる。神獣とは霊獣・瑞獣とも呼ばれる聖なる動物であり、神とも神の使いとも考えられてきた。いずれも想像の産物ではあるが、そう簡単に片付けることのできない長い歴史を持つ。

今回はこの神獣に注目し、館蔵・寄託品の中から主に中国古代の青銅器に見られる神獣の姿を特集した。同様の開催主旨を持つコレクション展「愉快奇怪 神獣図鑑 やきもの篇」と連動した企画である。

青銅器をはじめとする中国の金工品は、まず名称が難解であり、表現される文様が複雑であり、その用途も一見ただけでは不分明である。担当者からすれば、これほど魅力的な世界はないのだが、美術館に足を運んでくださる多くの観覧客にさえ敬遠されがちな



展示風景

野である。そのことを自覚したうえで、少しでも多くの方に中国工芸に親しんでいただきたいという切なる願いが今回の企画の根底にある。なるべく平易に、普段目にする身近なものになぞらえ、日常使用する器物に即して解説することを心掛けたつもりである。すべてはこの分野を理解する契機となればとの思いである。今回の展示作品は中国古代の青銅

器を中心に銅鏡や仏教工芸と犀角杯によって、重要文化財一件（青銅盤龍文鏡 大阪・国分神社所蔵）を含む全四十九件で構成し、展示ケースごとに次のような八つの大まかなテーマを設定した。まず、「奇怪なすがた」として盤龍・辟邪・鴟鵂の不可思議なすがたを提示し、次に「イメージの源泉 けものたちの姿」で神獣文様の源泉としてクマやトラといった具体的な獣文を紹介した。そして「饕餮文 神獣文の王」で中国古代の饕餮文と青銅器の役割について理解を深め、「怪獣 正体不明の獣文」で漢代以降に盛行する獣文を紹介した。神獣文の中でもっともよく知られるのが龍であろう。「龍さだまらないそのすがた」「龍 そのすがたの変容」「蟠螭文 鏡の中の龍」で龍のすがたの変遷を追い、最後に「鳳凰 瑞鳥のおりたつとき」で日本の仏教工芸にあらわされた鳳凰文までを紹介し、次室の「やきもの篇」へとバトンを渡した。以上のように、神獣を種別ごとに紹介することで、図像内容の把握をうながしたうえで、器物の用途や機能の理解をはかった。

会期が夏休み期間ということもあり、小中学生の自由研究に役立ててもらえればという思いで通例のコレクション展よりも対象年齢を下げ、平易な解説を心掛けたつもりだった。ところが意外なことに、むしろ大人たちから好評を得ることができたのは驚きであった。看視員経由でお褒めにあずかっただけでなく、SNS上でも解説が好評である旨を同僚から知らされたことも有難いことであった。というよりも、小中学生は足を運んでくれていなかったようである。「難しい」というイメージを払拭するのは容易なことではない。楽しい学びの場、感動と気づきの場を提供する試みはまだ道半ばである。

（児島大輔）

令和二年七月一日〜八月十六日

愉快奇怪神獣図鑑 やきもの篇

夏休みの時季にあわせ、子どもたちにも楽しんでもらえるよう企画した展示である。金工品を中心とする「中国古代篇」に時代的に続く形で構成し、中国の影響を受けた朝鮮半島や日本のやきものも展示した。また、見開きの本をかたどった解説パネルで、やきものならではの神獣の特徴を補足し、図鑑のような雰囲気になるよう演出した。

やきものには、古くから想像上の動物（神獣）があらわされてきたが、それらが内包するイメージや役割は、家畜のようなものもあれば、人間味あふれる怪物や、吉兆を告げる霊獣など一様ではなく、時代や地域などによって変化している。本展示では、龍・麒麟・獅子・鳳凰の大きく四種に分けて、生産国別、時代順に展示し、そのイメージの変遷を追った。それにより、江戸時代の日本では、権威や吉祥寓意をもつ中国の神獣の影響を受けつつも、華やかさや可愛らしさを重視していた様子を明確に示すことができたように思う。

（杉谷香代子）



展示風景より
《三彩 龍魚形水滴》清時代・19世紀
ダイアナ・カーゴ引揚品
本館蔵 なにわの海の時空館移管品

令和二年七月一日〜八月十六日

琳派の草花図

本展示は、平成三十年度に修理された「燕子花図」を展示するために企画したものである。光琳落款の「燕子花図」を中心に、対青軒印が捺される「藤袴図屏風」（個人蔵）や方淑印の「柳図・立葵図团扇」など琳派らしい草花図九件のほか、光琳の息子・寿市郎の養家に伝わった重要文化財「小西家伝来・尾形光琳関係資料」から画稿や図案など十八件をあわせて紹介した。同資料の中には様々な草花が見られるが、本展示では燕子花や梅や菊など光琳が得意とした草花を特に選んだ。実際に展示してみると、華やかな本画とシンプルな素描が互いに引き立て合いバランスが取れているように感じられた。そのような対比も見どころの一つとなったのではないだろうか。

なお、「燕子花図」の修理に伴い以下の知見を得た。①作品とともに伝わる下張り文書が詳細に調査された結果、従来指摘されてきた通り、風炉先屏風を切り詰めて掛幅装にされたことが緑青焼けの痕跡などから確認された。②軸木に「軸木師 忠光（花押）」と「文政九戌七月造之 浪花表具師吉田清兵衛 店久助」の墨書が見つかった。ここに記して後考を俟つ。

（秋田達也）



展示風景

令和二年九月一日～十月十一日

中国の石造彫刻

山口謙四郎氏（一八八六一―一九五七）が蒐集した山口コレクション中国石造彫刻を中心として、中国南北朝時代（五～六世紀）の仏教・道教像、二十五点を展示した。山口謙四郎氏は南北朝時代なかでも北魏（三八六―五三四）の造像に強い関心を持っていたらしく、そのコレクションはこの時期の都ぶりを示す優品や地方性豊かな仏像、さらには道教像まで幅広く網羅している。

本展では、山口コレクションを代表する北魏天安元年（四六六）銘如来坐像を端緒に、続く東魏―北齊、西魏―北周へと仏像・道教像の顔立ちや体つきが数十年単位で変化していく様相を、時系列にそって展示することで視覚的にわかりやすく示した。あわせて、地域によって異なる様式が並存する、南北朝時代後期における仏像・道教像の多様性を紹介するべく、地域ごとにまとめて展示した。このように、展示室の手前から奥へ作品が年代順に並ぶ時間軸と、制作地域の異なる作品群が左右に並ぶ空間軸により、はるか千五百年前の中国南北朝時代における仏像・道教像の変遷と広がりを感じることができる場とした。展示を振り返ってみると、まさに中国南北朝時代の仏像・道教像の教科書のような作品群であり、中国を訪問した形跡のない山口謙四郎氏の中国彫刻に対する、稀にみる見識の高さを明確に示していた。

（齋藤龍一）



展示風景

令和二年九月一日～十月十一日

大阪の仏像

関西で「仏像」というと奈良や京都をイメージされる方がほとんどかもしれないが、大阪にも数多くの優れた仏像が現存している。大阪市内にあっても、第二次世界大戦の空襲に耐えぬいた平安・鎌倉時代にさかのぼる仏像が少なくなく、また大阪府下には歴史ある古刹が点在しているのはよく知られている。当館は開館当初より関西一円をはじめとする寺院・神社より多くの宝物をご寄託いただいているが、第二次世界大戦以前から八十年あまりお預かりしている仏像もあれば、堂宇の改築等に伴い一時的にお預かりする場合もある。現在、縁あって大阪に伝わる多くの仏像をご寄託いただいていることから、はじめて「大阪の仏像」と題した展示を企画した次第である。

展示した仏像二十件の制作年代は、白鳳時代（七世紀）の重要文化財・金銅菩薩半跏像（観心寺）から江戸時代元禄十五年（一七〇二）の木造観音菩薩坐像（舍利尊勝寺）まで実に千年間におよんでいる。なおこれらの仏像の多くは数年の内にご所蔵寺院へお戻りになる予定であり、時と場を超え一堂に会するのは最初で最後かもしれない。

（齋藤龍一）



展示風景

令和二年九月五日～十月十一日

青緑い刻あおとぎ

新たな風景を創造しようとする洋画家たちの試みは、昔も今も、自然生命との親密な対話から始まる。刻ともにつるい、変容する自然の無限の営みを見つめながら、自己の内面を鮮明に照らすそれぞれの表現を模索してきた。大地をおおう海や空の「青」と、山野に生い茂る草木の「緑」は、自然生命と向き合う画家たちの、もっとも本質的な感覚を映す色彩であり、表現技術といえる。大正時代から戦後にわたる二十余の作家の個性豊かなまなざしを、中国の青磁、青花磁器とのコラボレーションでご鑑賞いただいた。

天王寺で創設され枚方に移った、大阪美術学校で斎藤与里に師事した園部晋（一九〇一―六二）、大阪の財閥山口家の知遇を受けて奈良に住み、志賀直哉らと交流したことで知られる小見寺八山（一八八九―一九三四）はともに、いまはその作品をみかけることもめったにない大阪ゆかりの作家である。本展では、園部の「公會堂」（昭和二十四年）、小見寺の「清緑風景」（昭和五年）を紹介した。また、青磁は越州窯の盆、四耳壺、龍泉窯の盤、長頸瓶、青花磁器はコンダオ沈船引揚品（景德鎮窯・福建系諸窯）を紹介した。

（知念理）



展示風景

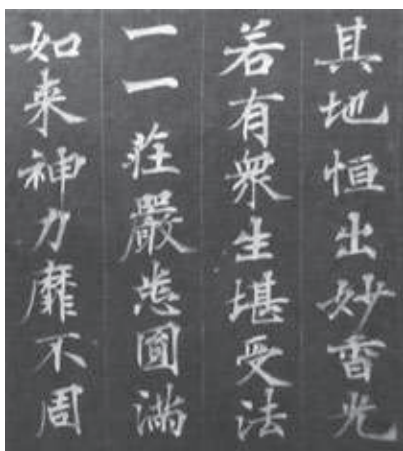
令和二年十月二十七日～十二月十三日

写経 ― 天平から鎌倉へ

六世紀に仏教が日本に伝わると、七世紀には写経が行われるようになり、天平時代に至ってその最盛期を迎える。特別展「天平礼賛」では国宝に指定されている「千手千眼陀羅尼経（玄昉願経）」「金光明最勝王経」「賢愚経」や「華嚴経（二月堂焼経）」といった天平写経の白眉が揃い、壮観な展示となった。

これに合わせ、当館の所蔵する田万コレクションと、寺院などから寄託していただいている経典のなかから、奈良時代の「紫紙金字華嚴経」（個人蔵）、「大般若経」（本館蔵、重要美術品）、平安時代の「紺紙銀字法華経」（滋賀・延暦寺蔵、重要文化財）、「紺紙金銀字交書正法華経（中尊寺経）」（大阪・大念佛寺蔵、重要美術品）、「紺紙金字大金色孔雀王咒経（神護寺経）」（本館蔵）、鎌倉時代の「彩箋墨書法華経」（兵庫・太山寺、重要文化財）などを陳列し、時代が下るにつれ次第に和様化が進み柔軟で優美になる字姿、墨だけでなく金泥や銀泥を用いて書かれた文字や、表紙の裏の見返し絵など、多様な写経の美をご覧いただくこととした。

（弓野隆之）



《紫紙金字華嚴経》
奈良時代・8世紀
個人蔵

令和二年十月二十七日〜十二月十三日

高き空から ― 仏教美術

本展は二〇二〇年のはじめから続く新型コロナウイルス感染症流行の状況下で行われた展覧会である。五月二十六日の美術館再開から五か月が経ち、新型コロナウイルス感染症拡大下での開館にもようやく慣れてきた頃だったように思う。しかし相も変わらず、日本全国、世界中の感染者や死者の数が毎日のニュースから聞こえ、市民が少しの外出にも新型コロナウイルス感染症感染の不安を抱えながら生活していた時期である。その状況は二〇二一年二月の現在も続く。

そのような時期に開く展覧会として、息苦しい日々には美術館に足を運び、楽しみを見出そうとする人に少しでも晴れやかな気持ちを提供できる内容にしたいと考えた。タイトルの「高き空から」には、作品に表される小さな空から少しでもものびのびとした空気を感ずてほしいという気持ちを込めている。

陳列作品は計二十三点。近畿一円の寺社よりお預かりしているご宝物から、雲や日月などの空に関わる具体的なモチーフを持つもの、あるいはポーズや視線で空が暗示されるものなどを集めた。また、病を癒すとされ人々の祈りを受けとめてきた、薬師如来に関わる造形も紹介した。

(石川温子)



展示風景

令和二年十月二十七日〜十二月十三日

秋色を愛でる ―近代日本画を中心に―

本展示は、展示期間が晩秋にあたるため、秋らしい日本画を展示したいと考え企画したものである。単純な動機であるがただそれだけである。

「晩秋」になると障子を繕っていた母の姿を思い出して描いた上村松園。月が昇る蕭条たる「枯野」とそこにたたずむ狐を迫真の描写に装飾性を融和させて表現した児玉希望。燃えるような「紅葉」（個人蔵）を青や金との対比により鮮やかに描き出した横山大観。

以上、当館を代表する秋らしい近代日本画三点に加え、磯田湖龍斎「秋野美人図」、岡田米山人「箕面探楓図」（個人蔵）、西山完瑛「雀躍稻穂之図」（個人蔵）、橋本閑雪「霜日」、「秋夕帰牧」、浜田観「富有柿」といった作品を展示した。上記三点（「晩秋」「枯野」「紅葉」）の印象が強いため、その他の作品は比較的控えめなものを選び、作品同士が喧嘩しないよう間隔をあけて展示するように気を付けた。

実際に展示してみると、秋らしい美しさだけでなく何となく寂しい秋の気配が展示室に満ちていたように思う。コロナ禍の中、美術館を訪れた人達に秋色を愛でただけだとしたら幸いである。

（秋田達也）



展示風景

令和三年一月九日〜二月七日

松樹千年、終に是朽ちぬ ―絵画の中の自然美

松樹は千年なるも終に是朽ち、槿花は一日なるも自ら榮となす。白居易の放言詩のこの一節をひいて表題とし、本展を企画した。

松樹はどんなに長命を保つといつてもいつかは枯れてしまうといい、槿花（むくげ）はたった一日の命であっても自分の栄華を知って咲き誇るといふ。命の長い短いに心を惑わされることなく、自分の生を全うすることの大切さをうたうこの詩に着想を得て、松や柏などの木々を主題とする作例と、可憐な花々を画く作例をあつめ、対比的にみえるように展観した。

新型コロナウイルス感染症の流行が長期化し、新しい生活様式やコミュニケーションが提案され、みなが人混みを避けて身体的距離を確保し、飛沫の生じる会話を控えている今、どのような展示をすべきか、自然と考えるようになった。本展は作品を通して先人の美意識や人生観にふれ、今を生きるヒントを探ることができないか、そういった試みのひとつである。

（森橋なつみ）



顧大申《老松飛瀑図》
清・康熙3年（1664）
本館蔵（阿部コレクション）

令和三年一月九日～二月七日

生誕二〇〇年 三輪田米山

—大阪中之島美術館山本發次郎コレクション—

三輪田米山（一八二一—一九〇八）は、江戸から明治にかけて活躍した愛媛松山の神官で、生家の日尾八幡神社の祠官を務めた。書は王羲之、趙孟頫や唐様の諸家、仮名では「秋萩帖」などを広く学んだが、斗酒をあおって揮毫した独特の作品は、豪放な筆法、雄大な気宇で人気を博している。

「伊予の三筆」の一人にも数えられる米山だが、彼を「我が国近世五百年間不世出の大書家」と激賞してその作品の収集に励み、全国にその名を知らしめたのは、大阪中之島美術館のコレクションの礎を築いた山本發次郎であった。

地元愛媛ではかつてから展覧会が開かれていたが、二〇〇四年には千葉・成田山書道博物館で、二〇〇六年には大阪・日本書芸院の主催で、二〇一五年には徳島県立文学書道館で大規模な展覧会が催され、その受容はますます広がりを見せている。生誕二〇〇年にあたり、その真価を改めて問い直してみる機会とした。

（弓野隆之）



三輪田米山《無為》
明治時代・18-19世紀
大阪中之島美術館

令和三年一月九日～二月七日

辛丑年 牛を描く

本展示は、令和三年が丑年にあたることから企画したものである。猪や鼠を描いた作品だけで展示室を満たすのはなかなか難しいが、牛ならば一室ぐらい何とかなりそうだと思う。また、展覧会タイトルは、十一年前の寅年に「庚寅年 虎を描く」というコレクション展があったことを思い出しそれに倣った。

牛を描く歴史は古く、フランスのラスコー洞窟やスペインのアルタミラ洞窟に描かれた旧石器時代のもとのされる壁画にもその姿を見ることが出来る。また、牛は早くから家畜として飼育され、農耕や運搬を助けるなど、人々にとって大変身近な存在であった。のんびりとして愛らしいだけでなく、時に雄々しい牛たちの姿は、日本の絵画の中にもしばしば登場する。

このように壮大な流れを述べたものの、実際には絵画九件と磁器一件という小規模な展示であった。近代の日本画家・橋本関雪の作品を一つ入れたが、その他は江戸時代の作品であり、図らずも大岡春卜、森周峰、岡田米山人、上田公長、森一鳳といった大坂の絵師の作品が中心となった。丑年の新春らしく、ゆったりとしながらも力強い雰囲気のある展示になったと思う。

（秋田達也）



展示風景

令和三年一月九日～二月七日

江戸の南画

本展示は、正月らしくおめでたい「松竹梅図」や「紫雲蒼龍図」を展示したいと思い企画したものである。どちらも大坂を代表する南画家・岡田米山人の作品であるため、江戸時代の南画で展示室を構成することにした。

米山人のほか、南画の大成者として知られる池大雅、岡山出身で独自の南画を確立した浦上玉堂、関東南画をリードした谷文晁、名古屋に生まれ幕末の南画界で活躍した中林竹洞など著名な南画家の作品を中心に展示した。少し珍しいところでは、遠江に生まれ掛川藩の御用絵師・村松以弘に絵を学んだ後、江戸に出て谷文晁や渡辺崋山に師事したとされる平井颯齋の「山水図屏風」（個人蔵）を紹介した。

また、飛騨高山の酒造家・二本俊恭（長嘯亭）が蒐集した書画五十点が貼られる「長嘯亭蒐集書画貼交屏風」（個人蔵）とともに、二代目長嘯亭（俊恭の息子）のために谷文晁が描いた「水墨山水図屏風」（個人蔵）を並べて展示したところも本展示のポイントの一つである。水墨が主体のやや地味な雰囲気での展示だったかもしれないが、全体的には正月らしく引き締まった雰囲気になったと思う。

（秋田達也）



展示風景

令和三年一月九日～二月七日

あちこちの風光明媚ふうこうめいび

画家はほんとうに旅が好きだ。自然が織りなす清らかで美しい眺めを精神的に歩き、新しい画想を求めて眼前の風景に筆一本で格闘を挑む。画家ならずとも、時間と財布が許せば、あちこち旅してまわりたいたいのだが、世界的な感染症の拡大で旅行を計画しにくい社会状況がもう一年以上も続いている。ならば風光明媚を巡る旅感覚をせめて絵画で味わっていたらどう、と本展を企画した。嵐山、琵琶湖など関西圏の定番名所から、箱根や有馬の温泉地、さらにフランスのパリ、カンヌまで、近世絵画と日本洋画から名所・風景を描く作品十九点を寄せて構成した。

例えば、大和長谷寺（西国三十三所観音霊場・八幡札所）へのご案内にあたっては、「長谷寺縁起」（大阪・長谷寺蔵）という絵巻を5メートル近く開いた。牡丹や紅葉の名所としても古来より名高いが、初瀬山の麓から中腹にかけて伽藍が広がり、仁王門から本堂まで続く三九九段の登廊がなかなか美しい。絵巻画面の短い天地では垂直方向に建築を積み上げてゆることができないゆえ、左へ左へと伸びる登廊の描写がみられて面白い。

（知念理）



展示風景

令和三年一月九日～二月七日

磁州窯の陶枕

近年のやきもののコレクション展では、生産窯に注目した展示をほとんど行っていないため、本展示を企画した。

磁州窯は、河北省邯鄲市に位置する、日用のやきものを量産した民間の窯場であるが、最も隆盛した宋・元時代には、同様の製品を焼く窯は華北一帯に広がっていた。やきもの製の枕・陶枕は、その代表的かつ特徴的な器種の一つである。夏に涼しく、健康にもよいと言われ、寝具として実用されたほか、墓へ副葬したり、家の魔除け道具としたり、贈答にも用いられた。

磁州窯系諸窯では各種の装飾技法が発展したこともあり、陶枕の枕面をキャンバスとして様々なデザインが施された。その文様からは、当時の人々の思いを読み取ることができる。例えば、子宝や立身出世など現世利益を願う吉祥文様や、文人の隱遁気分を味わえる山水図など。出陳作品ではないが、中には物語の一場面を描いた趣味性の強いものや、失恋ソングのように浸れる詩が記されたもの、「忍」と大きく書かれた作品なども知られている。民間の様々な需要に柔軟に応えた大規模窯ならではのバリエーションの広がりといえるだろう。

(杉谷香代子)



展示風景

令和三年一月九日～二月七日

富士礼賛 ― 近世絵画を中心に ―

本展示は正月にオープンするため、初夢に見ると縁起のよいとされる「一富士二鷹三茄子」にあやかり、富士を描いた作品を展示することにした。富士は古より信仰の対象となり、様々な芸術の源泉にもなってきた。東海道の往来が盛んになった江戸時代には、富士講が流行したこともあり富士図が多く見られるようになる。

実際の展示では、狩野探幽「富士雲龍図」(慶瑞寺蔵)、上田耕夫「富士図」、中林竹洞「神洲奇観図」(個人蔵)といった富士を中心とした作品はもちろん、池大雅「浅間山真景図」(個人蔵)や葛飾北斎「潮干狩図」のように遠景に富士を描いた作品も取り上げた。全体として、正月らしく清々しい雰囲気になったと思う。

またこの機会に、本年度新たに寄贈された北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」を初めて御披露目した。水色が通常とは異なる色版で摺られているが、同様の摺りによる現存作品の中では状態が良いものである。富士とは関係ないが、一緒に寄贈された東洲斎写楽「三代目市川八百蔵の田辺文蔵」も展示した。これまで浮世絵版画を所蔵していなかった当館のニューフェイスたちである。

(秋田達也)



展示風景

令和三年二月二十日～三月二十一日

ニッポンのかがやき 本朝金属工芸史

日本の金属工芸の歴史は、銅鐸や銅鏡から仏具や茶釜など実に多様なジャンルの作品に彩られている。今回は当館の所蔵品と寄託品の中から国宝・重要文化財を含む日本の金工品の数々を紹介した。一見しただけではわかりにくいそれぞれの用途や、見どころを解説した。

北欧スカンジナビアにおける利器材料を元に石器時代・青銅器時代・鉄器時代と三時期に時代区分をおこなったクリスチャン・トムセンによる歴史観は、先史時代のヨーロッパや中国にも適用可能な卓越した汎世界的な文明史論であった。ただし、こと日本列島の歴史に関してはこの理論は通用しない。日本列島における金属利用は



重要文化財《金銅三昧耶形五鈷鈴》
大阪・高貴寺蔵

弥生時代にはじまり、青銅器と鉄器とが同時に中国大陸から流入しているためである。

そうした日本列島における金属利用の大きな流れを知る意味で、この展示ではまず銅鐸を紹介することから始めた。次いで紹介する銅鏡は古墳時代に中国鏡を模倣することで徐々に独自の表現を獲得する。平安時代以降に独自の自由な絵画表現を獲得することとなった和鏡の中から重文・青銅獅子牡丹文鏡（滋賀・浄信寺蔵）、重文・青銅萩扇面文鏡（本館蔵）等を紹介した。

日本の金工技術における仏教美術の存在はきわめて重要である。様々な技術・表現が仏教文明とともに日本へ渡来してきたからである。ここでは中でも日本的な優美な表現が特徴の国宝・金銀透彫唐草文華籠（滋賀・神照寺蔵）や重文・金銅三昧耶形五鈷鈴（大阪・高貴寺蔵）【挿図】、重文・銅貴型水瓶（本館蔵）や銀鍍金透彫箱（本館蔵）等、当館の館蔵・寄託品を代表する名品を紹介した。さらに、国宝・菊唐草蒔絵螺鈿手箱内容品（和歌山・熊野速玉大社蔵）が展示に華を添え、金工品のひろがりを示したつもりである。

今回も平易な解説を心掛けた。「愉快奇怪 神獸図鑑」でも触れたように、工芸を担当する者の現場の実感として、この分野が敬遠されがちであることの自覚から出発している。多くの方に金属工芸に親しんでいただきたいという思いが企画の根底にある。繊細な造形や精緻な文様、多彩な用途や素材の特性を活かす技術など、その魅力は果たしてどれだけ伝わったであろうか。

なお、二月二〇日にFACEBOOKライブで配信された「OSAKA MUSEUMS 学芸員TALK & THINK」におおっ、の展示の概要を報告した。
(児島大輔)

令和三年二月二十日～三月二十一日

花咲くやきもの RIVIVAL!

昨年一月より日本では新型コロナウイルス感染症が急速に流行し、翌月の二月二十九日には当館も休館の措置をとることとなった。それは日展とコレクション展が開幕してからわずか六日後のことだった。この時のコレクション展の一つが、「春爛漫 花咲くやきもの」である。季節に合わせた華やかな作品というだけではなく、それまで展示する機会の少なかった作品も積極的に出陳し、当館の所蔵・寄託品の幅の広さもご覧いただける展示だったが、ほとんどお客様の目に触れることなく閉幕してしまった。

そこで、ちょうど一年後の早春にリバイバル展を企画した。昨年と比べると展示スペースが半分になったため、作品を絞ってよりテーマが明確に伝わるよう工夫した。そのテーマとは、一つには美しい花々でやきもの鑑賞を楽しんでいただくこと。もう一つは、やきものに咲いた花にも植生分布があることの紹介だ。すなわち、日本では季節を感じる花々が選ばれるのに対し、中国では吉祥の意味をもつ花が好まれるなどモチーフの選択に地域性が見られるのである。未だ感染症流行収束の目途が立たないが、本展示で少しでも明るい気分を提供できたならば幸いである。

(杉谷香代子)



《色絵染付 沢薊模様皿》(5枚のうち)
富本憲吉 昭和11年(1936)
本館蔵(辻本コレクション)

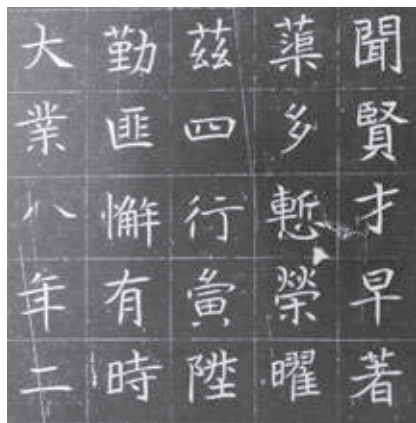
令和三年二月二十日～三月二十一日

宮人たちへの鎮魂歌 — 隋の石刻

隋朝はわずか三十七年という短命に終わったが、南北朝を統一し唐朝の礎を築いた。書においては楷書の発展史上とても重要な時代で、特筆すべきは墓誌の豊富さとその魅力である。本展では煬帝の宮廷に勤めた「宮人」と呼ばれる女性たちの墓誌に焦点をあて、隋の石刻を紹介した。

隋の宮人墓誌は現在四十数通が知られる。なかでも一九二五年、洛陽城西から三十九通の宮人墓誌が陸統と出土した。当館師古齋コレクションにはそのうち二十九点の拓本が備わる。煬帝の大業元年(六〇五)洛陽は副都として建設が始まった。同時に女官も増置され、尚書省に準じて六局二十四司が整備された。図の賈氏の墓誌には彼女が尚食局の司籥という職を務め官秩は六品、大業六年に五十九歳で亡くなったことなどが記され、資料価値が高い。いかにも隋代らしい整った楷書で書かれており、また女性の墓誌にふさわしく、端正で繊細な筆致を見せる。隋の墓誌の中でも名品の一つに数えられる。

(弓野隆之)



《宮人司籥賈氏墓誌》
隋・大業6年(610)
本館蔵(師古齋コレクション)